

光明院稲荷神社

稲荷神社の機能の一つは、仏教寺院の保護者としての役割を果たすことである。

この小さな稲荷神社は、かつてこの場所にあった光明院の役割を果たしていた。光明院は、天台密教の寺院であり、1240年に弁覚僧正（日付は不明）によって設立された。光明院が設立されたとき、勝道上人（737-817）が創立した四本龍寺以外の日光の様々な寺院を統合した。1868年に神仏分離令が出され、1871年に光明院や四本竜寺など日光の仏教寺院が統合されて輪王寺となった。

稲荷は、農業と米および他の穀物の生産、商売繁盛、および物質的な富に関連する神である。19世紀まで米は日本の共通通貨であり、米との関連で、成功、富を表している。稲荷は別名荼枳尼天とも呼ばれ、狐に乗る女神の姿をしている。

狐は稲荷の使者であり、口に鍵を咥えた姿に描かれていることが多いが、これは米が保管される倉庫の象徴となっている。

稲荷神社の狐は、しばしば体のどこかに願いを叶える宝石を持っている。この神社には、扉、軒先の屋根瓦、扉の上に、これらの願いを叶える宝石がたくさんある。